
聖夜の邂逅

みつば

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

聖夜の邂逅

【コード】

N3007D

【作者名】

みつば

【あらすじ】

元の身体に戻った新一。工藤邸で開かれたクリスマスパーティーに訪れた白い魔法使いの目的とは？魔女の手の平の上で踊らされているのは誰なのか。紅子様最強のどたばたコメディー…主役は出鱈目ドッペルゲンガーズの筈です。

例えばこんな出会い（前書き）

新一は解毒剤を飲んで無事元の身体に戻り、現在高校三年生。哀
ちゃんも解毒剤を飲まずにそのまま小学二年生に進級してま
す。

例えばこんな出会い

「ねえ君、暇？俺達と遊ぼうよ」

ナンパの常套文句で呼び止められ振り向けば、こちらも典型的な見るからに軽そうなお兄さん達。ここは米花駅前の広場。クリスマススイブともなれば、電飾で華やぎ人の数も半端ではない。数えるのも面倒なくらい声を賭けられ、さすがにウンザリしていた所だった。

そんなに遊び相手をご所望なら地面とお友達にして差し上げましょよ、などと物騒な事を半分本気で考えてしまったのもこの際ご愛嬌である。

それでも不機嫌な内心を隠して、小首を傾けた小泉紅子は極上の笑みと共に言った。

「私、急いでますの」

サラリと揺れる長い黒髪や、ゆるやかに弧を描く口許、透けるような白い肌に、吸い込まれそうな深い色を放つ瞳。人外な美しさを目の当たりにした男達の思考が停止している間にさっさと歩き去る、それが常のかわし方だった。のだが、

今回はそううまくいかなかったらしい。

天使の微笑みを完璧に造りあげ、横を擦り抜けようとした紅子は、がっしと掴まれた己の手首を一瞥し、形の良い眉を顰めた。逃れる為の微笑みは、どうやら逆の効果をもたらした様である。

「そんな冷たいこと言わないでさあ、カラオケなんかどう？」

もちろん奢るよ、などと笑う青年達に、紅子は正面から向き直った。瞳に冷たい色を混ぜて薄く笑んだ後、言の葉を紡ごうと開いた唇は、しかし次の瞬間再び閉じられる事となる。

メシッ、なんていう、あまり気分の良いものではない音と共に目の前の男は地面に崩れ落ち、紅子の手首が解放されたからである。咄嗟の事に対応できず、らしくもなく呆然と立ち尽くしていた紅子は、まだ中身の入っていないような缶ジュースがゴロゴロと転がっているのを見た。

仲間達が、缶ジュースを頬に喰らって崩れ落ちた青年に駆け寄り、ぺちぺち叩いたりする内に、周りにはどんだん人だかりが集まってくる。

そんな時、その場から動くタイミングを失ってしまった紅子の手を引く者があった。

「…こつち！」

走りながら遠くなっていく人だかりを一度振り返り、それから己の手を引いて人込みを後にするその人物を後ろから紅子は眺めた。始めは驚きの色に染まっていた表情が徐々に緩み、ゆるやかに口角が持ち上がる。

「初めまして、光の魔神」

小さな声でそつと囁かれた言葉は、誰の耳にも届かなかった。

「大丈夫ですか？」

駅前広場から少し離れた所で、新一は無意識に掴んでしまった手を慌てて離して尋ねた。

哀に頼まれた買い物物の帰り道に、絡まれているこの少女を見つけたのは偶然。気付けば買って来た缶ジュースを蹴り飛ばしていた。人が集まってきたので半ば一方的に引っ張って来てしまったのだが、今更ながら少しやり過ぎた気がしないでもない。少し心配になり少女を覗き込むと、

「ええ、ありがとうございました」

俯き加減だった少女の顔が上げられ、そう言うとニコリと微笑んだ。

少女の整った顔立ちに、新一は思わず赤くなった頬を隠すようにマフラーを口許まで引き上げ、

「良かった。それじゃあ」

そう言って踵を返そうとしたのだが、コートの裾をあつさり掴まれてしまった。

「ジューズ…！本無駄になってしまったでしょう？」

お詫びにお茶でもいかがかしら、と少女は聞いてくる。なんとなく断れない不思議な空気が漂い始め、新一はほとんど無意識に頷いてしまっていた。

何故あの時頷いてしまったのか、米花駅の近くの喫茶店でコーヒーを飲みながら新一はボンヤリと考えていた。お詫び、つまり奢ってもらえるからとホイホイ初対面の人に着いて行く程賤しいつもりはないし、まして相手が女性なら尚更である。

向かいには、先程会ったばかりの少女が紅茶を手に微笑んでいる。

「あなたとお話してみたかったから、少し強引に連れて来てしまったのだけれど…」

「ごめんなさいね、とまるで心を読んだかのようなタイミングで謝る彼女に慌てて首を横に振った。事実、強引に連れて来られたつもりは全くない。あの時の、自分の判断能力がおかしかっただけの話である。」

彼女が優雅に紅茶を口に運んだ時、店員がそつと領収書をテーブルに置いて行った。のこのこと此処まで着いて来てしまったが、さすがに女性に払わせる訳にはいかない。そう思い立ち、白い紙を自分の方へと引き寄せると、カップをソーサーに戻した彼女と目が合った。

「それじゃ、御礼になりませんのに…」

「いいんですよ、ジュースの1本くらい気にしないでください」

それなら何か他の…、と思案する彼女から視線をずらして、新一は窓の外に目をやった。どんよりと曇った空は、今にも白い氷の結晶を零しそうな鉛色をしている。ホワイトクリスマスになれば、明日会う予定になっている蘭は喜ぶのだろうが、生憎今朝の天気予報を見る限りそれは望めそうもなかった。

「そうね、ホワイトクリスマスにして差し上げてもいいのだけれど…貴方、明日電車に乗るつもりなのではなくて？」

電車が止まってしまわないくらいのもつて加減が難しいのよ、可愛い彼女を寒空の下待たせる訳にはいかないものね、などと空を見上げながらの彼女の台詞に、新一はカップを落とさなかった自分を思わず褒めてやりたくなった。ギリギリで大惨事の元凶となることを免れたカップを置き、静かに視線を彼女に向ける。

なんとというか今、目の前の少女はいろいろとオカシナ事を口走らなかつただろうか？確かに明日は蘭と出掛ける予定があつて、当然電車にも乗るつもりで、雪が降れば、電車が止まってホームで待ちぼうけなんて事もあるかもしれない。

でも、明日蘭と会う事なんか話しただろうか？と新一は首を捻り、すぐに思い直した。そもそも、ホワイトクリスマス云々の話すらした記憶はない。

そういえば先程も謀つたかのようなタイミングで謝られたような気がする。それに、彼女はまるで雪を降らせる事ができるような口ぶりで確か、加減がどうか言っていた。

魔女かなにかですか？なんて馬鹿げた質問が一瞬頭の中に浮かんで消える。基本的に新一は、そういった非科学的なモノを信じるタチではない。

「確かに電車が止まると困りますね」

ツツコミたい所だらけだったが、いろいろ考えた末、言いたい事を堪えてどうにか返事をする、少女はどこか含みのある笑みだけを返し再び窓の外を見た。

「あら？」

少しの驚きと多分の楽しいげな響きが混ざつた声色を聞き、少女の視線を辿って窓を振り返ると、キャップを被つた少年が歩いて来るのが見えた。少年もこちらに気付いた様子で、人懐こそうな笑みと共に少女に片手を上げる。そして、そのままの流れで新一の方に視

線を向け、瞬時にピシリと硬直した。心なしか笑顔が引き攣っているように見えるのは気のせいではないだろう。

少年の不審な動きの理由が分からず、真意を見定めようと新一が瞳を光らせると、その引き攣った笑顔のまま少年はゆっくりと首を傾け、2、3度頭を軽く叩いて再び少女の方に視線を戻した。じゃあな、と盛大に引き攣った口の動きだけで告げると、ぎこちない動きで遠ざかっていく。

それを見送る少女が一人楽しそうに笑みを深くして言った。

「ホワイトクリスマスも幻想的でいいけれど、貴方には聖夜にふさわしい白き魔法使いを……」

「……は？」

こちらの疑問には答えてくれる気のないらしい少女は、そろそろ失礼しますわ、と静かに席を立った。

「ああ、それと……」

席から一步進んだ所で彼女は振り返る。

「空腹時のブラックコーヒーは体に毒ですよ？」

それだけ告げてニコリと笑うと、不思議な少女は店を出ていく。

彼女が出ていった店の入口から視線を外せぬまま口に運んだカップには、いつの間にかカフェオレが入っていた。

例えばこんな出会い（後書き）

クリスマス記念小説です。さくつと気軽に読んでいただけたらと思います。一応連載になってますが、おそらく次話で終わるか…。紅子様最強です！次回、探偵団の皆や哀ちゃん、そして白いあの方も登場予定ですので、ご期待下さい。もう一つの連載の方、コレ書き終わったらちゃんと頑張りますので（滝汗）

時にはどつにもならないことだって

「ご苦労様。遅かったのね」

2時間程前に出掛けた新一が買ってきた物を片手に工藤邸の玄関口に顔を出したので、哀は声を掛けた。

「ああ、まーな」

気のない返事をしながら、どこか呆けた様子でビニール袋を手渡してくる隣人に眉を顰める。

「…どうかしたの？」

どうにも様子がおかしい隣人に、蘭さんの浮気現場でも見てしまったのかしら、などと、からかいを含んだ発言を向ければ、半目で振り返った新一は呆れたように告げた。

「あのなあ、蘭は今日おっちゃんとおばさんと食事に行ってたよ」「知ってるわ。だから淋しい貴方をささやかなクリスマスパーティーに招待してあげたんだもの」

蘭が両親の仲を取り持とうと必死に思案し、なんとかこぎつけた約束は運悪くクリスマススイブになってしまったと、哀は蘭本人から聞いていた。しかし、途中で抜けてくると言った蘭を、家族で食事なんて久し振りなんだろう、と説得したのが外ならぬ新一だということだからお話にならない。本当に素直じゃないんだから、というのが哀の本音である。

「淋しいって、おめーなあ…大体、招待も何も此処は俺の家だつての」

博士が学会で留守にするから体よく俺に探偵団の子守を押し付けようとしてるだけじゃねーか、との呟きは勿論スルー。懽然としてリビングのソファーに座ろうとした新一の手に、金やら銀やらの飾りを持たせて窓際に置かれたツリーを指差す。元々高い所の飾り付けは全て任せるつもりだった。渋々といった感じでツリーに向かった後ろ姿に、静かな溜息を一つ零して哀は問い掛けた。

「それで、何かあったの？」

問われた方は、あー、とか、うー、とか唸りながら髪をがしがし撫でている。そのまま視線を窓の外に移してポツリと呟いた。

「……おめーさ、魔法とか超能力って信じるか？」

「…はあ？」

推理バカと称される現実主義者は、どうせ事件絡みのトリックでも考えているのだからという哀の予想を素敵に裏切って随分ぶっ飛んだ質問をしてくれた。おかげで、クールだと言われる普段の自分からはおよそ考えられない素っ頓狂な声を上げてしまうという失態を犯してしまった。

「あ、いや、いいんだ。何でもねえ。聞かなかった事に…」

「何よそれ、聞かなかった事にできるとでも思ってるの？」

今更自分の言動に動揺し始めたのか、目を逸らし顔の前で手をヒラヒラ降る新一。そんな彼をジロリと睨みつけてそう言えば、新一は降っていた手を下ろし、しばらく悩んだあと静かに話し始めた。

コンビニからの帰り道に絡まれている少女を助けた事、御礼にと喫茶店に誘われた事、新一の心を読み魔法を仄めかすような少女の言動の事、最後に言われた『白き魔法使い』の事、そして、いつの間にかカフェオレに変わっていたカップの中身の事。片手を顎に添えて真剣に話す新一からは、ふざけた様子などまるで見受けられないが、話の内容は頂けない。

「その憐れむような生温い目で見るの止めろって。嘘は言ってねえ」

「憐れんでなんかないわ、頭の使いすぎで気でもふれたんじゃないかって思っただけよ」

「なお悪いだろーが！本当に…」

「その白い魔法使いさんって、貴方がもらえるの？」

言いかけられた言葉を遮って、話の内容から推測したことを問えば、案の定新一はキョトンとしている。

「だって『御礼』なんでしょう？」

話が進まないので付け加えてやれば、ありえないという顔で笑う。

「いやいや、それは比喻なんじゃねえの？いくらなんでも人はもらえねえだろ」

「あら、そうかしら？」

「そうかしらって……」

新一の笑みが消えた時、響いたチャイムが来客を告げた。二人が壁際の置時計を見たのは同時、時計の針は既に五時半を廻っていた。

「吉田さん達ね、きっと」

複雑そうな顔の家主を放って、哀は玄関に向かった。

「あー、どうすっかなあ……」

今日はクリスマスイブ。

生憎と雪は降っていないが、午後七時を廻った今、じっとしていれば凍えてしまいそうなくらいには寒い。そんな刺すように冷たい風の吹きさらす工藤邸の屋根の上に、快斗は座り込んでいた。薄手のコートにジーンズという、たいした防寒にもなっていない恰好でい

る以上、こんな所に長居は無用なのだが如何んせん決心がつかないのだ。

「くっそー紅子の奴、何考えてやがんだ！探偵の家にこのこ訪ねて行く怪盗なんて…」

ありえねー！と、それなりに大きな声での叫びは全て風にのまれて消えた。

そもそもの事の発端は四、五日前のクラスメートとの会話だった。前日にやっていたマジックの特番の話から始まり魔法云々にまで発展した、たわいもない雑談。

「魔法が使えたらなあ…通知表なんて怖くねえのに！」

「だよなあ、魔女狩りなんてしなけりや今も残ってたんじゃねえ？惜しい事したよなあ」

「っーかさ、もし魔法が普通にある世界だったら黒羽の価値って半減だな」

「ハハ、言ってる！マジックの不思議さが際立たねーもんな。大体間違ってたんだよ、頭良し顔良し運動神経も馬鹿みてえに良いしマジックもプロ並なんて冗談みたいな生き方しやがって。不公平にも程があらあ！まあ普段の素行については敢えて言わねーけどっ」

「まあ、その阿呆さがあってこそその黒羽だしなー」

「…オイ、てめーら本人の前で好き勝手言いやがってイイ度胸じゃねーか」

マジックから話題が逸れた時点ですっかり聞き役に回っていた快斗だったが、さくつとズレた話の内容にさすがに黙っている訳にもいかずに口をはさんだ。そのままの流れで、何で魔女狩りなんてやったんだよお、なんて級友のぼやきに、ついうっかり失言をしてしまったのである。

「魔女なんかいねえよ」

中世に魔女と称されたのは薬草の知識に長けていたり占いを行ったりしただけの女性だ、とそういうつもりで言った快斗だったが、直後に背後から漂う異様な気配に口を噤んだ。途端に嫌な汗が背中を伝う。

「あら、黒羽君…」

後ろの席で青子達と談笑していた筈の紅子が、いつの間にか目の前でニコリと微笑んでいた。

「あ、紅子…さん？今のは別に…」

「今言った事、よく覚えておくことね」

ブリザードが吹き荒れるような冷笑と、共に発せられた美声に場の空気が凍り付いた。凍らせた張本人がさつさと元の席に戻っているのを見送り、快斗は深い深い溜息をつくといかに崩れた。

そして今日、偶然通り掛かった喫茶店の窓際の席に紅子を見つ、
穏やかでない内心を隠して朗らかに挨拶を試みたのである。あれか
ら直ぐに冬季休業となり一度も会わなかったのも、もしかしたら忘
れてくれているかもという期待は少なからずあった。しかしそんな
淡い期待は、向かいに座っていた新一を見た途端に脆くも崩れ去る。

本当に何の冗談だ、と絶叫したくなるような珍妙かつデンジャラ
スな組合せを目撃し、多分に引き攣っているだろう自分の表情を自
覚しながら、快斗は一度現実逃避に陥った。

悪い夢でも見ているのかと、頭を軽く叩いてみたが状況は変わら
ず、寧ろ新一の視線がますます痛くなる始末。外ならぬ紅子の事、
何か企んでるに違いないと思わず逃げ出したのがまずかったのか、
数時間後に掛かってきた電話にさらに頭を痛めることになるとは、
この時全くもって予想していなかったのである。

『今夜マジックショーの依頼を引き受けてくれないかしら？知り合
いの家でパーティーをするのよ』

自室で鳩の世話をしていた時に突如響いたコール音。ディスプレイ
イに表示された魔女の名に一瞬怯みながらも電話を取れば、挨拶も
なしにこう告げられたのだ。マジックショーについては何の問題も
ない。プロのマジシャンを指す身としては寧ろ大歓迎だ。でも、
何かある気がしてならないと返事を渋っていた快斗を見兼ねてか、
紅子が急に話題を変えた。

『そういえば明日、中森さんの家で開かれるクリスマスパーティー、
勿論貴方も出席するのよね？』

「ああ、行かないと青子がうるせえしな。…言っとくけど、明日の予行練習代わり、とか言いたいんなら無駄だぜ？そんなもん必要ねえ」

そう返せば、電話の向こうで紅子はくすくす笑う。

『フフ、そうじゃないわ。私早く行って中森さんの料理の手伝いをする約束をしているのだけど…』

途端快斗は青ざめた。全身から血の気が失せていくのを感じる。次に聞こえてくるだろう単語に、身体中が全力で警報を鳴らしていた。

『もし今日のショーに行ってくれないなら明日魚料理を…』

「わああああ、行きます！行かせていただきます！！」

『そう？ならお願いね。時刻は午後七時半頃、場所は米花町2丁目21番地…ああそれと、あの白い衣装でお願いしますわ』

ぐったりと聞いていた快斗だったが、最後の言葉には素早く食いつく。

「…白い衣装？」

『ええ、貴方の仕事着よ』

「おめーまだそんな事言っ…」

言い返す気力も残っていないような弱々しい声色にか、紅子が溜

息を零す音が聞こえる。

『別に認める気がないならそれでもよろしくてよ。それなら《仮装》ということにしても構わないわ。』

スキー学校の時のようにね、と言い残して電話が切れた。

そして、嵌められた感たっぷりで色々と納得のいかないまま教えられた住所まで来てみれば、そこは因縁浅からぬ名探偵の家。何故途中で気付けなかったのかと自分自身を叱咤しながら、入る決心もつかず、唯玄関に突っ立っている訳にもいかず、今に至るのである。

「寒い…」

眩きが冷たい風に溶けていく。もうそろそろ凍死しそうだ、と快斗は本気で思った。

「しゃーねえ！凍死はゴメンだ！」

意を決して立ち上がる。頭の奥で響く魔女の高笑いには、全力で気付かないふりをした。

「歩実はね、サンタさんに会いたいなあ」

「俺はうな重いっぱい食いてー！」

博士の置いていったプレゼントの包装紙を開けながら子供達が楽しげに話すのを、新一は料理の皿を片手に見ていた。

「光彦君はサンタさんに何お願いしたの？」

「僕はですね、少年探偵団にふさわしい難事件を頼んだんです！ちやんと手紙も書いて枕の下に置きましたよ」

それぞれが無理難題をサンタに課している様子に思わず苦笑を漏らしていると、玄関のチャイムが響いた。

博士かな？と走っていく子供達を眺めてから、キッチンから出てきた哀と顔を見合わせる。博士の帰宅は確か深夜の筈、ならば工藤邸への客人かと足を進めようとした途端、子供達の叫び声が聞こえてきた。

「何だ！どうしたっ？」

慌てて飛び出せば、そこには固まった3人組と見慣れた白い姿。

「し、新一お兄さん！」

「キッドです！キッドが訪ねて来ましたー！」

「うわっ！うわああ！」

見事に動転した子供達が新一に駆け寄っていくのを静かに見ていたキッドは、シルクハットに片手を添えると、日だまりのような笑顔で言った。

「今晚は、工藤君」

常の冷涼な気配など微塵も感じさせない微笑みに、その場の空気が硬直した瞬間だった。

時にはどっにもならないことだって（後書き）

まず始めに謝罪を…（汗）クリスマス小説の筈では！？年が明けて
しまいます！しかも二話完結のつもりがどっにも終わらなくて、三
話になりそうです。頑張ります…

真実を知っているのは

クリスマスイヴの工藤邸には、小学生が3人と見た目だけの小学生が1人、高校生が1人に、そして年齢不詳の白装束が1人。

「紅茶でいいかしら？」

「あ、おかまいなくー」

七時半を廻った頃現れた突然の来訪者は、勧められたソファで哀が容れた紅茶のカップを両手で包み込むようにして香を楽しんでいる。なかなかシニールな、それでいて当の本人達だけが和んでいるその光景は、優秀な筈の新一の頭脳を停止させるには十分だった。

突然身体が小学生サイズに退行しても、多少なりとも抵抗はあったにせよ普通に小学校に通えてしまうくらいには、順応力が備わっていると自負していたつもりだったのだが。目の前で繰り広げられているドッキリ企画さながらの珍事には、どうやら自分は着いていないらしい、と新一は一人壁にもたれながら何処か他人事のように思った。同時に哀の、いつになく楽しそうな（それこそ何やら裏のありそうな）微笑が少し気になってもいる。

怪盗と哀だけが楽しげに談笑しながら刻々と時が過ぎていく。どうしようもない違和感に痺れを切らしたのは光彦だった。

「あなた、本物の怪盗キッドじゃありませんね！キッドならもつと気障な言い回しをします！」

「冗談みたいなその空間に確実にひびを入れた彼の勇姿に背中を押されて、元太と歩実も必死に頷いて同意を示す。

「そ、そーだ！俺達、本物に会った事あるんだぜ」

「キッドは『哀ちゃん』なんて言わないよー！」

一瞬の沈黙が舞い降りる。しかし言われた当人は、尤もな指摘に動揺するでもなく楽しそうに身を乗り出して子供達の顔を覗き込んだ。素顔を隠す気など微塵も感じられないドアップに子供達が怯むと、くすくすと笑いを零しておどけたように言う。

「でもよ、本性はこんななかもしれないぜ？気障なのは演技だったりして」

ぐっ、と言葉に詰まる二人を余所に、尚も光彦は食いついた。

「でもキッドは18年前から犯行を続けてるんですよ？お兄さん若すぎです！」

「ほら、怪盗キッドは変装の名人だって話、有名だろ？見た目なんか当てにならないんじゃないかな？」

白い指先で自分の顔を示して告げた怪盗は、しかし光彦の次の台詞に口角を引き攣らせた。

「…で、でもキッドはもつと違う感じが…、お兄さんオーラないです！」

「……ぷっ」

言外に馬鹿にされている怪盗が可笑しくて、新一はつい吹き出してしまった。すぐに恨めしげな怪盗の視線が突き刺さり、咄嗟に背を向けたが小刻みに震える肩は止まらない。光彦の言動が筋の通ったものであったから尚更可笑しかった。第一、どこの世界に探偵宅を訪問する犯罪者がいるというのだ。

そう考えてみるとソファで不機嫌顔を晒している彼は、もう偽者にしか見えなかった。昼間会った少女の知り合いか何かなのだろう。

「本当に来たのね。彼、貴方の言ってた白い魔法使いさんでしょう？」

はいどうぞ、とブラックコーヒーを差し出した哀が、そのまま新一の隣の壁に寄り掛かった。時の止まっていた玄関口で新一や探偵団を見兼ねて、この怪盗を家に招き入れたのは外ならぬ彼女である。パツと自分の靴を消してから上がり込んだ怪盗に少々目を丸くしたようだったが、その後は全くと言っていいほど動揺の見られない哀に、ちよっぴり感心しつつ新一はコーヒーを一口啜った。

「ありや、本物じゃねえだろ。光彦の言ってた通りだと思うぜ？歳については何とも言えねえけどな」

クスリ、と笑うだけの哀の視線の先には小学生3人組と、彼等によつて偽物と断定されたらしい怪盗が早速打ち解けている。白い手袋に包まれた長い指から小さな赤い花が鮮やかに現れ、途端に上がる歓声。初步的なマジックではあるが、それを感じさせない見事な腕だった。

「昼間の子に雇われたプロのマジシャン…とかな？」

思わず目を奪われて咄嗟に零した推測だったが、一番ありそうな展開だと思った。今夜はイヴだ。特別に仮装を引き受けたとしても別段おかしい事ではない。

花をキャンディーに変えた怪盗は、ふと立ち上がり新一を振り返って思い出したように告げる。

「あのさ、工藤君」

元々怪盗を穴が開きそうなくらい凝視していた新一は、瞬時にぶつかった視線に一瞬怯んだ。その様子に気付いてか、子供達にキャンディーを配ってから怪盗はフワリと笑う。

「実は依頼を請けててさ、此処にはマジックショーをしに来たんだけど…」

いいかな？と小首を傾げる姿はどうしようもなく違和感バリバリだった。その衣装でソレはやめてほしいと切実に思ってしまう。よく見れば背格好も似ているし、シルクハットに隠れた顔は、はつきりとは見えないがそれなりに若いようだ。おまけにマジックができる…

違うのは気配くらいだよなあーなんて、知らず怪盗をガン見していた新一に軽い調子の声が飛んだ。

「あのおー？」

そんなに見つめられると照れるなー、などと何処までもふざけた様子で怪盗が笑っている。

「バ、バーロ！誰がっ……じゃなくて、マジックショーの話だったな。お願いするよ、そいつらも楽しみにしてるみたいだし」

からかいの言葉に乗せられそうになる自分を抑えて了承の意を伝えれば、子供達が嬉しそうに騒ぎだす。それを満足気な笑みで見た怪盗は、

こほん

ひとつ咳ばらいの後シルクハットに手をかけ、優雅に一礼した。途端に彼の周りの空気が透明な緊張を纏う。突然の澄んだ気配にあてられて新一は思わず身体を強張らせた。

「……っ！」

しかしそれも一瞬の事で、怪盗が白いマントを翻した時には冷涼な気配は跡形もなく消え失せてしまっていた。

「Ladies and Gentlemen！今宵限りの魔法、どうぞお楽しみください」

シルクに包まれた指先がパチンと小気味よい音を発する。一瞬のうちにもその腕には一羽の銀鳩が現れ、バサバサと羽音をたてて飛び立ったそれは白い羽を数枚だけ残して軽い音と共に消える。ヒラヒラと舞う羽の1枚を空中で捕らえた怪盗の手の中には、いつの間にかシンプルな携帯電話が一つ納まっていた。

「なっ…!!」

見慣れたストラップに気付いて慌ててジーンズのポケットを探る新一。それをチラリと一瞥してから、小さな破裂音と共に怪盗は携帯電話をストラップの束に変えてしまう。

「あっ！オイ！」

新一の抗議の声は、子供の声高な歓声に虚しく掻き消された。

「すっごーい！お兄さん何でも出せるんだね！」

「キッドよりうまいんじゃないか？」

飛び交う賛辞を怪盗が満足そうに聞いている間にも、パラパラと落とされたカードは床に見事なタワーを建設していく。

「眉間に皺が寄ってるわよ、探偵さん？」

隣で黙って腕を組んでいた哀がボソリと呟いた。怪盗に向けていた睨むような視線をはずし振り返れば、哀の弧を描く口許が目に入っただけとも言えない脱力感に襲われる。

「灰原：オメーいつから気付いてた？」

「あら、何の話かしら？」

つれない返事に、新一の目が半目になる。

「…だから、あいつが正真正銘ホンモノだって事だよ」

「私そんな事言った記憶ないのだけど？」

あくまでしらばっくれる哀に、小さな溜息を一つ落として新一は腕を組み直した。視線はまた怪盗に戻しておく。

「気付かなかった俺も俺だけどな…。考えてみりゃあオメーが初対面の一般人にあんなに猫被る訳ねえし」

「工藤君ってホントに失礼よね」

隣の少女から尖った気配が渦巻くを感じ、新一は彼女から僅かに距離をとった。その様子に、今度は哀が溜息を一つ落とす。

「まあいいけど。いつまで此処でこうしてるつもりなの、探偵さん？」

「それは…」

「窃盗は現行犯が基本。確かな証拠を抑えてないからって黙って見てるんでしょうけど、彼がそう簡単に尻尾を出すかしら？…マジックが終わった瞬間に彼、逃げるんじゃない？」

「…んなことあ分かってるよ」

そう言っつて怪盗を強く睨めば、次々と奇術を繰り出す彼の気配が僅かに揺れる。予想通りの反応に満足の笑みを漏らした時、光彦がこちらを振り向いた。

「灰原さん、もっと近くで見ないんですか？新一さんも。本当にすごいですよ！」

言うだけ言って、彼の意識はもう完璧にマジックの方に向いている。

「それじゃあ、そうさせてもらおうかしら。…ああそれと、これ博士から預かってたの忘れてたわ」

一歩踏み出したところで振り返って哀が差し出したのは、隣家に整備に出していた腕時計型麻醉銃。そのまま子供達の輪に入っていく哀を目で追えば、その先には白い怪盗の横顔が見える。

受け取ったばかりの麻醉銃をそつと構えた。距離は遠くない。それに、標的はその場で立ち尽くしたままマジックを披露しているのだ。これほどまでの好条件はないだろう。怪盗は新一に対して横向きに立っているから、この位置から狙うなら首か、とゆるゆると照準を合わせていく。

当たんねーだろうな、なんて漠然と思いながら発射された針は、やはり怪盗には届かず、本人によって突然外されたシルクハットに刺さった。予想していたとはいえハットを自分の顔のすぐ横で持つて、バサバサとお菓子をを出している姿に思わず舌打ちが漏れる。

こんな至近距離でどうしてそこまでタイミングが測れるのか、あらためて相手の規格外な能力に感心しながらも呆れてしまう。煌々と光る照明のもとでシルクハットを外したにも関わらず、新一のいる所からは絶対に素顔が見えないようハットを上手く操る器用さ。至近距離からの攻撃を見切る身体能力。よく観察すれば、彼が本物かどうかの判断材料なんていくらでも見つかるというのに、なぜ気

付けなかったのか。

『マジックが終わった瞬間に彼、逃げるんじゃない？』

先程の哀の言葉が脳内でこだまする。

「誰が逃がすかよ……」

呟く新一の表情には探偵の笑みが浮かんでいた。

聖夜の邂逅

「お楽しみいただけましたでしょうか？次で今宵最後のマジック……」
「ちょっと待て」

消失マジックという名の工藤邸からの脱出を阻止してくれちゃったのは、先程まで壁に懐いていた名探偵だった。その手はしっかりと白い衣装を掴んでいる。

「……あのー、工藤君？」

快斗は、掴まれている腕を目の高さまで持ち上げヒラヒラと振ってみせる。それと同時に腕の向こう側で力チリと合わさった探偵の視線が、それはもう好戦的に光ったのを快斗は見逃さなかった。

ああ、マズイな…

乾いた笑いが零れる。

「悪いな、おめえら。マジックショーはここまでだ。ちょっとコイツに用があるんでね」

騒ぐ子供達に嘘臭い笑みを向ける探偵。とうの昔に快斗によって危険人物のレッテルをべつたりと貼られているだけあって、その無言の圧力は小学生にも有効らしい。

大人しくなりながらも残念そうな顔を隠しきれていない3人に、料理の皿を両手に抱えた哀が示し合わせたようなタイミングで声を掛けた。

「それじゃあ、今から隣の家でゲームでもしましょう？博士の新作があるのよ。夕食は向こうでもいいわよね、工藤君？」

「ああ、あとで行くから」

ゲームにつられた探偵団に皿を持たせて、哀はさっさと退室していく。部屋を抜けた先で目が合った快斗に向けてニコリと微笑んだ彼女の背後には、小学生らしからぬ悪女のオーラが見えた気がした。

ボタン、と扉の閉まる音がして子供達の声が次第に遠くなっていく。「危うく騙される所だったぜ？コソ泥さんよお、いったい何が目的だ？」

室内に静寂が訪れたのを見計らったかのように、新一が口を開いた。「何のことだよ？俺は依頼を受けただけの唯のマジシャンだったの」

感情を綺麗に封じて、意味が解らないとでもいうように肩を竦めてみせれば、当の探偵は極悪面をさらに黒くするばかり。今更こんなごまかし無駄なんだろうとは思っていたが、ここまで確信を持たれていると、いつそ清々しさまで感じてしまう。

僅かな沈黙のあと、不意に掴まれていた手を離され、意図が読めずに相手を見遣れば楽しげに揺れる瞳とかち合った。

「ふーん…。じゃあお前、名前は？」

「…は？」

何か酷い空耳を聞いた気がした。

「だから名前だよ、な・ま・え。別に唯のマジシャンに名前聞いたって何の問題もねえだろ？」

歳は？まだ学生か？近くに住んでんのか？

そう言っただけで目の前で笑う確信犯は、どうやらどっちに転んでも立場の悪い快斗をからかう気であるらしい。端から本名など期待して

いないだろう相手に偽名を唱えるのも虚しいだけだ。性格悪いなオ、とはさすがに口に出来なくて、

「悪いけど、個人情報公開しない主義なんだよね」

につこり笑い返ししながら、シルクハットを下げ顔を隠せば、尚も探偵は面白そうに口角を吊り上げる。

「へえ…？こんな腕のいいマジシャン滅多にいねーから興味あったんだけど。そうか、残念だなあ」

「……………」

てめえ白々しいつたらねえな、とハットの下で思わず半目になっている快斗を余所に、探偵はさらに意地の悪い冗談を次々吐きつさりげなく入口のドアに寄り掛かっている。ちゃっかり退路は塞いでくれる辺り幾分か探偵らしさが垣間見えなくもないが、今の彼は恰好の玩具を見つけた子供のように愉しそうで、『KID』の名を進呈したいくらいだと、快斗は半ば本気で思ってしまった。

軽い現実逃避を試みたところで、両者とも偽りの笑みを崩さないエセ和やかな雰囲気がだらだらと続くこの場の居心地の悪さが改善される訳もなく。

「ま、せっかく来たんだし。ゆっくり話そうぜ？」

いろいろと聞いてみたい事もあるしな？

探偵の含みを持たせた口調に、「冗談じゃないとばかりに直ぐさま断りの意を伝えれば、

「まあ、そう言うなって。飯でも食いながら…ああ、そっぴや最近事件で知り合った人が近くで寿司屋やってんだ。結構評判良いんだぜ。なんなら今から電話して……」

「……っ!」

そろそろ本気で脱出の算段を立てていた快斗に返ってきたのは、予想外も甚だしい提案だった。今が旬だという『さ』で始まる海洋生物の名前をずらずらと並び立てる非情な探偵の声が、ぐわんぐわんと頭に響いて視界が揺れる。

さ○な嫌いを知られたら怪盗生命は終わったも同然、激しく危険である。なんてったって飛んでる相手に麻酔針やら殺人ボールやらをプレゼントしてくれる程容赦のない彼なのだ。現場をアレで埋めるくらい嬉々としてやるに違いない。

生臭さで満たされた現場…。うっかり想像してしまった更なる恐怖に身を震わせながらも、くらり、と遠退く意識を、怪盗としてのプライドと根性を総動員して何とか引き留めた。

てめえわざとじゃねーだろうな!？と吠えるのは心の中でだけ。そんな訳ない、唯の冗談だと判ってはいても、あまりに脈絡のない言動と受けたダメージの大きさを考えるとついそう思いたくもなってしまうのは仕方のない事だった。

悍ましい想像を記憶から抹殺してふと我に還れば、静寂が辺りを支配していた。探偵の言葉を途中から意識的にシャットアウトしてしまっただけ、どんな経緯を経てこの状況になったのかがサッパリ分からないのは致命的だ。

この人物の前では一瞬の油断でさえ命取りだと身をもって知っている筈なのに随分と気を散らしてしまっていた自分に、常にはありえないペースの乱れをヒシヒシと感じる。その要因は、この衣装でキッドを演じていなかった己の行動の奇異さのせいでもあるのだろうが、やはり多分にこのいじめっ子のせいだろう。

静かな空間で探偵が小さくついた溜息がやけに響いた。同時にそれまでのふざけた雰囲気掻き消え、伏せられていた瞼が上がりれば月下で対峙した時と同じ、罪人を追い詰める慧眼が現れる。鋭い視線に晒されても、自分の立場が悪くなった事より、アレについて話が展開しなかった事に対して安堵の息をついた快斗はやはり何処かズレていた。

「まあ、冗談はこのくらいにして……。此処に来たからには覚悟してもらおうぜ？」

射殺さんばかりの眼光を見せて探偵が言い放つ。お遊びは終わりだと暗に示す彼の言葉のお返しに、いい加減精神的疲労がピークに近かった快斗は演技を放棄し、シニカルな笑みを口許に刻んだ。

「そこまで人の正体を決め付けてくれるからには、名探偵にはそれなりの言い分がある訳だ？」

お聞かせ願いますでしょうか、と彼に対する呼称を変えて怪盗の気配を匂わせれば、探偵の笑ひはますます深くなる。

「自ら敵地に、それもそんな目立つ格好で突然現れる犯罪者なんて普通は考えられねえ。まして怪盗キッドの素顔はトップシークレットの筈。本物だと信じろって方がまず無理な話だな」

だが逆にそれを利用するってんなら話は別だ。

淀みなく話す探偵の顔には、先程までとはまた違った色の楽しげな笑みが浮かぶ。

「今夜はクリスマススイヴで、此処では子供達がパーティーを開いた。ここまで状況が揃った上で堂々と正面玄関から訪問し、軽い口調と雰囲気わざと怪盗と対極の人柄を演じれば、マジシャンが誰かに依頼されて仮装してやってきたと思わせる事は容易い。そして本物だと認識させる事にウエイトを置かないのであれば、この状況はかえって好機って訳だ」

「…けど、それだけじゃ『仮装したマジシャン』と『怪盗キッド』の確実な線引きはできないだろう?」

快斗の指摘にも余裕の表情は崩れない。

「確かに、決め手となる証拠を掴ませない所は流石と言うべきなんだろうが…細かく突き詰めていけば見えてくる事はあるもんだぜ? 例えば玄関で靴を消したのは言わずもがな逃げ道を一箇所に絞らない為、好青年演じてた割に灰原のいれた紅茶に口を付けなかったのは必要以上に此処に痕跡を残さない為だと考えれば…」

ま、その前に、マジックを始める時の気配とか、麻酔針を見切った身体能力なんか、一般人の枠から大きくはみ出してる事を自覚するべきだけだな。今夜はいつになく計画に粗の目立つステージだったんじゃないか?

なあ、完璧主義者の怪盗さん？

探偵の最後の方の言葉がグサグサと心に刺さる。名探偵の家などとはつゆ知らず、脅迫まがいの電話一本でのこのこやって来たのだから計画もなにもあつたもんじゃないが、”粗の目立つステージ”とはシヨウマンとしてちよつと頂けない。

「まさか名探偵殿がお相手とは思ってなかったからな」

次回に期待してくれ、との皮肉気な笑みを浮かべて返せば、一瞬眉を顰めながらも言質は取ったとばかりに探偵はなにやら物騒なものを構えた。

麻醉銃の照準がピッタリと合わせられる。

ドアは危険物所持の探偵の後ろ、他の脱出口は施錠済みの窓くらいだが今動けば針が飛んで来るのは確実だ。避け切れないことはないだろうが、狭い室内では万が一ということもある。わざわざ危険を侵すこともないだろう。閃光弾や煙幕を使ったとて、己の視界をも奪った状況で針を乱射されれば危険なことには代わりない。視線だけで周囲の状況を確認し、一瞬で打開策を考える。

ならば、と袖口をそつと探った時、探偵が口を開いた。

「お前、何しに来たんだ？」

途端、快斗はピタリと手をとめて探偵の言葉を反芻する。

「ここにお前が狙うようなビッグジュエルはねえし、第一予告がでてない。マジックに託つけて俺の携帯を消したのは警察に通報させない為だろう？ そうまでして此処に留まった理由は何だったんだ？ それに、さっきのお前の発言…、此処が誰の家か知らずに来たような言い方だったよな」

まさかホントに魔女が関わってるなんてふざけた事言わないよな？

本物だとバレた以上尤もな意見だとは思うが、そんなこと聞かれても困る、というのが実際のところ快斗の本音だ。 ”ふざけた事”とまで言われて正直に「魔女に脅されたから」なんてあまりにお粗末な事、言えるわけがない。 とうかが言いたくない。

「…自分で推理したらどうだ、名探偵？」

”名探偵”の部分強調して、とりあえず返事を丸投げしてみた。謎を残すのは怪盗の特権。その謎が一生解けまいが知ったこっちゃんない。案の定不機嫌そうに顰められた眉に内心苦笑していると、納得できる答えが得られなかった探偵は、針の発射ボタンに手をかける。

空を切る音が聞こえて、目の前ギリギリを銀色の光が過ぎていった。 チツという舌打ちを聞きながら、飛来物を認識するより早く半身を翻した己の身体能力に感謝する。 が、ここで快斗はある事実に気がついた。

袖口に仕込んでおいた筈の痺れ薬がない。 いや、痺れ薬どころか煙幕も閃光弾も催眠ガスもない。

快斗の周りの空間に疑問符が飛び交った。しかし、何故と考える暇を探偵が与えてくれる訳もなく、再び銀色の光が向かってくる。

それをマントを翻すことで避け、素早く新たな策を練る。一度使った手だが、手持ちが殆どない以上この際構っていられない。探偵が畏にかかってくれることを願って、快斗は少々強引な手段を選んだ。

真実を知っているのは（後書き）

やっと更新です。待ってくださっていた方^{いないかもですが}本当に申し訳ありませんでした！！またまた終わりませんでした…。一体いつまで続くのか（オイ） 話の流れはラストまでしっかり決まっていますのですが、細かい所を修正する度に長くなっていくという…（え） クリスマス小説だということは、さくっとスルーしてください…；；；

「今晩はご機嫌いかが？」

鉛色をした寒空の中吹き荒れる北風がガタガタと窓を揺らす。色鮮やかな電飾で飾られた家々が立ち並ぶ住宅地に、一時は幽霊屋敷との噂もたつた大きな洋館、工藤邸が飾られないいつもの姿でひっそりと建っていた。

そのリビングでは、およそ現代では見ることのない古風な衣装を纏う怪盗が、麻酔銃を向けられていることなど何でもないことのように悠然と佇んでいる。対峙する探偵からは聖夜に似つかわしくない不穏な空気が素敵に垂れ流されていた。

「なにか勝算があつての振る舞いなのか、それとも単にポーカーフェイスが巧いだけなのか判断がつかず、動く気配のない怪盗に新いがやや焦れ始めた時。」

「バツタンっ！！！」

「玄関の扉がひどく乱暴に開けられる音、次いで響いてきた声に新一の意識は、根こそぎ持っていかれた。」

「たっただいま〜 新ちゃん、メツリークリスマス！！！」

「年中無休でハイテンション、間違う筈もないよく通る母親の声が玄関から大音量で響く。」

緊張の糸がプツンと途切れた瞬間だった。

日頃の母親の暴走に対する無意識の拒否反応なのか一瞬視線がぶれる。まずい、と慌てて意識を手元に集中させるが、その隙を見逃すような相手でないことは長年に渡る付き合いで分かりきったこと。ニヤリと笑う怪盗の口が”じゃあな”と動くのを捉えたのち、一瞬で家中の照明が落ちた。

「しまった…っ！！」

光に慣れた目が像を結ぶことはない。人の動く微かな気配だけを辿って放った麻醉針も、そのすぐ後にカツンと何かが床を打つ音を聞く限りまたも避けられた事は明白だった。本当に奴は実体のある人間なんだろうかと本気で疑う。が、

「逃がすかつ！」

思案も落胆もする間などない。窓際に向かった怪盗の気配を追って新一はすぐさま一歩踏み出した。ボンヤリと輪郭を映しだした目に、窓の前に立つ人影が映る。

追い付く筈だった。

……本来ならば。

「…う、わっ!？」

突然襲った浮遊感。突然身体に全く力が入らなくなったのだと理解するよりも先に、床への顔面アタックを根性で回避できたことは喜ばしい限りだったのだが。それでも立ち上がるどころか身体中が痺れて指の先ほども動かさそうにない己の状態に、いつの間、と唇を噛んだ。

怪盗の姿は既にある。あれから母親の声が聞こえてくることもなく、冷静になってみれば以前も騙された怪盗の十八番の声色だったのだろうと容易に想像がつく分、たとえ一瞬でも動揺した自分が情けなかった。

「くっそ…!」

思わず零れた独り言。

「だから空腹時のブラックコーヒーは毒だと御忠告差し上げましたのに」

「……っ!??」

誰もいない部屋の奥からの、聞こえてくる筈のない第三者からの返答に新一は息を詰めた。声のした方に視線を向けると同時にパッと明かりが回復し、昼間会ったばかりの少女の姿が浮かび上がる。綺麗な笑みは昼間と同じものだったが、その登場の仕方は大問題だった。

スラリと長い脚を組んで彼女が座っているのは、どうみても宙に

浮かび、ふよふよと揺れている筈の上。

「ああ、毒といっても死ぬようなものじゃなくってよ？ただの痺れ薬、怪盗さんからいただきましたの」

無断ですけど、と微笑うスタンダードな魔女の登場に新一はただ呆然と眺めていることしかできなかった。

「意外ね、何も聞かないのかしら？」

一瞬で距離を詰め、黙っている所を興味深そうに覗き込まれる。どうやらこの筈は彼女の意思に従って動くらしかった。

「…聞いたら答えてくれるのか？」

聞かないのではなく、あまりの出来事に固まっていただけなのだが、敢えてそこはスルーである。

荒れ果てて幽霊屋敷と呼ばれた過去があるのが、腐っても工藤邸セキユリティが甘い訳がないのにいったいどこから入って来たんだとか。吊られていると考えるにはどうにも無理がある動きを見せる浮かんだ筈の事とか。怪盗さんからいただいたって事は己のこの状況はアンタのせいとか。聞きたいことなど有り余る程だ。いっそ夢であってほしいと頬を抓りたい気持ちでいっぱいだが、生憎身体は痺れて動かない。

「…そうね、貴方には御礼も兼ねてですけど協力してもらった訳だし。質問次第では答えて差し上げてもよくてよ」

「協力、ね…。協力者にしちゃ随分と酷い扱いだな」

「いったいどの辺が御礼だったんだ、と問えば魔女はクスクスと笑う。」

「彼が捕まるのは私も本意じゃないの。いつか私の虜にして差し上げる方ですもの。本当にあの人を潰すような真似なんてしないわ。今日はちよっとした仕返しをしたかっただけ。…でも貴方も彼と同罪ね。それに私が使わなくてもどうせ怪盗さんが使ったでしょうし、痺れ薬については謝りませんことよ？それと御礼なら…」

怖いまでの綺麗な微笑を浮かべてよく分からない事をつらつら宣った魔女は、スツと新一に近づくと耳元に小さな声で一言、どこかで聞いたような事を囁いた。

せつかくの聖夜を寂しく過ごす貴方へ賑やかなトキを。

それを聞いた新一は深い深い溜息をつき、魔女はその様子に笑みを深くする。

「でも、もう少し追い詰めて下さらないと。せつかく貴方を選んだ意味がないわ…」

本当にお寿司を頼んでいたら面白かったなどと、またもよく分からない事を彼女は口にする。

推測するに、これはキッドに対する彼女の私的な報復で。彼を窮地に追い込むためのゲストとして自分が選ばれた、といったところだろうか。虜だとか寿司だとかイマイチ分からない部分もないではないが、とりあえず彼女は怪盗側の人間で、今回のコレは可愛い…かどうかは分からないが悪戯にすぎない、と。話の大筋は間違っ

ない筈だと新一は一人確信する。だが、彼女の言動に一つだけ、どうしても引つ掛かるものがあった。

「その、同罪って俺何かしたか？」

同罪というからにはキッド同様、なにか彼女の怒りを買うような事を自分がしたのは間違いないのだろう。そう問えば魔女の纏う空気が一気に冷えた。いや、実際に室温が下がった気がする。やべっ地雷踏んだか？と新一の顔色が少し悪くなるが、返ってきたのは思いの外静かな問い掛けだった。

「…貴方、今この光景を目にしても尚、魔法の存在を否定できて？」

「え…」

透き通った声が、まるでエコーがかかったように脳内でリフレインされる。言われた言葉に、流されるだけ流されていた優秀な筈の頭脳が幾分か常の思考能力を取り戻した。だが、冷静に思い返してみたらこそ瞬く間に脳内に疑問符が飛ぶ。

魔法。そんな非科学的なものは物心ついた時から信じていた記憶はない。それは今も変わらない筈で。

では彼女は…？

黙り込んだ新一を魔女は不機嫌そうにチラリと一瞥し、ふう、と小さくどこか諦めの色が含まれた溜息をついた。

「…まあいいわ。貴方達、私の言うこと成すことを全く信用して下さらない所もそっくりなのね」

「何の話だ…?」

「残念だけど、時間切れよ。彼への仕返しの不足分は後日私が返すことにして…そろそろお暇しますわ」

誰か来たようだから、と窓の外に目を遣った少女につられて新一年も視線を外に向けた。が、何も見えないし聞こえない。

ホントかよ、と視線を戻せばそこには誰もいなかった。

「それで、その女の子は消えちゃったのね?」

「ああ」

「でも新ちゃんの痺れ薬の効果は切れなくて、ここで私達が帰ってくるのを泣きながら待っていてくれたってわけね?」

「…泣いてねえ。大体俺は帰国の知らせだっけ聞いてねえよ!」

「やだわ、照れなくなっちゃった方がいいのよvせつかくのクリスマスなんですもの。蘭ちゃんにフラれたって哀ちゃんに聞いたものだから、新ちゃんが寂しくないようにパーティー蹴って帰ってきたんじゃない。ねえ優作?」

少女が姿を消してから十数秒後。

怪盗の声真似と寸分違わぬ台詞を吐きながら、蹴破る勢いでドアを開け帰宅した母親は、リビングの床に転がって呻いていた（身体が自由がきかない為勢いよく開いたドアに突き飛ばされた）息子を拾いあげ事情を聞いた。そのすぐ後に、タクシーの料金を払ってから現れた父親と、様子を見に来た哀が加わり、今すべて説明させられたところで母親のこの言葉である。

だからフラれてねえし寂しくもねえ！との主張は先程（ある意味昼間）から悉く無視され続けている。

「だが有希子、どうやら新一は我々が来なくとも愉快なお客人を2人も招いて十分楽しいクリスマスを過ごしたようだね。怪盗キッド：彼の天才的頭脳は今も健在なようだし、退屈はしなかつたろう」

ふむ、と顎に手をあてて、もう一方の手に乗せた物を観察しながら面白そうに優作は答えた。

「なあに、それ？優ちゃん何持つてるの？」

振り返った有希子に渡されたのは直径1センチ程、薄さは2ミリもないくらいの円盤型をした小さな機械だった。

「彼の落とし物だよ。傘立ての裏で見つけてね。ざっと見た感じでは数秒で周りの素材や質感に合わせて色が変わるスピーカーってとこかな。録音機能もついているようだから、仕掛けられていた場所から言っておそらく玄関の開閉音なんか録ってあるんだろう。得意の声色との併用で来客の存在をより完璧に錯覚させることが可能だからね」

まんまその手に引つ掛かった新一は、ぐつと苦虫を噛み潰したような顔をするが、反対に有希子ははしゃいだ声をあげた。

「ホント！もう私の手の色と同じになっちゃったわ」

賢い子だとは思ってたけど、こんなすごいモノ作っちゃうなんて流石ねv

「……………は？」

すっかり話の輪から外されかかっていたため咄嗟の反応が遅れた新一だったが、これには引つ掛かるものがあつた。

その、まるで小さな頃から成長を見守ってきた子供を褒める近所のおばさんのような軽い口ぶりは何なのだと、喉元まで出かかった台詞を間一髪で食い止める。この女性の前でおばさんなどと口にする程人生捨ててはいない。一度気持ちを落ち着けてから、再度新一は口を開いた。

「どういうことだよ！母さんまさかキッドの正体を…」

知っているのか、と続く筈だった言葉はしかし遮られた。そのまま、さくつと話を逸らされる。

「やーね、それを私に聞くの、名探偵さん？…そうだ、哀ちゃん。このスピーカー、博士に持って行ってあげたらどうかしら？」

「母さん、それ一応証拠物件だって…」

「それじゃあ、これも一緒にいいですか？そのテーブルの下に落

ちていたんですけど、スピーカーと対になってるマイクのようなので」

「灰原、だからそれも…」

「ああ、構わないよ。持っていきなさい。おそらく彼オリジナルの技術だろうからね、博士も喜ぶだろう」

「父さんまで何言ってる…！」

有り難うございます、と二つの機械をポケットに納めた哀。その様子に、新一は深い深い息を吐いた。

分かりきっていた事だ。この道楽夫婦に一般論は通じない。いや、単に息子をからかって遊んでいるだけとも言いが、ここに灰原哀が加われば己に勝ち目のないことなど。己の質問はさらりとかわされ、いつの間にか会話から置いていかれる。分かりきっていた事なのだ。

そこまで考えてふと、ある仮説が浮かんだ。

もし、あの黒髪の少女とこの隣家の少女が裏で繋がっていたとしたら。

思えば、怪盗が本物だと初めに気付いたのは。痺れ薬が仕込まれていた(らしい)ブラックコーヒーを己に手渡したのは。わざわざ口スから両親を呼んで今現在己に疎外感を味わわせているのは。

不意にその張本人と視線が絡まった。

「連射式麻醉銃に不具合でもあったかしら？」

「いや、特には…」

何だか物凄い剣幕に押されて語尾が小さくなる。

「せっかくの道具も、使い主の腕が伴わないとただのガラクタね」

徹夜続きのまま学会に行った博士がかわいそうだね。

養父思いの少女の怒りの原因はそこらしい。

確かに、無理言って作ってもらっておきながら一発も当てること
ができなかったことについては申し訳ないと思わないわけではない
し、返す言葉もないというのが本当の所だけねど。

けれど。

「あれは相手が悪かったというか…」

「あら、今のは怪盗さんに対する敗北宣言？」

「んな訳ねーだろ…!!」

思わず大声を上げてから、ハッと今の状況に気付いた。

「ちょっと新ちゃん！女の子に大声あげるなんて駄目じゃない!!」

そうでしたねいらっしやっただんでしたね、とか思いながら視線が
既に遠くを向いてしまっているのは、これから数時間に渡って戴け
るであろう有り難い格言の事を思えば仕方ないことだ。

「レディーに向かって……………」

つかつかと歩み寄って始まった母親のお小言に、逃げようにも動かない身体が恨めしい。元女優の美声は若き日の発声練習の賜物なのか、それほど狭いわけでもない室内中に響き渡る。

だから探偵は気付かなかった。

「計画は上手くいったのかい？」

薄く微笑んでいた少女にそつと尋ねた小説家と。

「気付いてたんですね。…工藤君が貴方に追いつける日はまだまだ遠そうだよ」

一瞬だけ驚きの表情を表した後、クスクスと楽しそうに笑った少女の存在に。

「詳しいところまでは分からないがね。人一倍警戒心の強い君が、いくから見知った姿だからという理由だけで素性の分からない者を家にあげるなんて考え難い。それに博士思いの君が、今夜の学会の事を知った上で徹夜なんてさせる訳がないだろう？ならば今夜の喜劇に君が一枚噛んでいると考える方が自然だよ」

よければ舞台裏の話をお聞かせ願いたいのだが。

「それは次回作の参考に？」

「いいや、まだまだ未熟な息子をからかって遊ぶために、さ」

心底可笑しそうに話す二人が質の悪い笑みを浮かべながら探偵を眺めていたことに。

今夜はご機嫌いかが？（後書き）

連日更新できましたV残るはEPのみ！！長い長いEPになってしまいそうな予感が物凄くするのですが、なるべく早く更新できるように頑張ります（。 。 ）ノご意見ご感想いただけると励みになりますので、もしこの駄文に何か思うことがございましたら教えてくださいただければと思います。 みつば

えびるーぐ

「だから悪かったって」

25日、クリスマス当日の朝。昨日とは打って変わって快晴となつたために人通りの多くなつた駅前商店街を歩きながら、快斗は謝つていた。

「もう！何度電話したと思ってるのよ！気付いたなら折り返して電話くれてもいいじゃない」

隣を歩くのは実年齢よりやや幼く見られがちの幼なじみ。現在こ立腹中である。

「だーからー！忙しかったんだよ。お詫びにこんな朝っぱらから付き合つてやっつてんだから、いーかげん機嫌直せつて、ほら」

大体なんで米花町なんだよ、ケーキなんて何処のだつていーだろ、と零しながら赤いバラを一輪手渡せば、少し機嫌の浮上した青子が拗ねたように答えた。

「だつて紅子ちゃんが美味しいお店知つてるつて言うから」

「……へえ、紅子が」

不意に話題に上つたクラスメートの名前に思わず顔が引き攣る。彼女が関わつてくるとなると、今自分が米花町にいるこの状況すら作為的に思えてくるから不思議である。

なにしろ彼女のおかげで昨晩は本当に酷い目にあつたのだ。何も知らずに天敵である筈の探偵の家にこのこ出向いた揚句、いつの間にか連射式にグレードアップしていた麻醉銃で何度も狙われたり危うく最大の弱点を露呈させそうになったり。袖口から忽然と消え去った煙幕やら閃光弾やらは、今朝方、自宅のポストから見つかつた時点で魔女様の仕業であることは明白であるし、おまけに暗闇の中でまで針を飛ばしてくれた名探偵のせいで試作段階のメカまで落としてきてしまったのだ。

てつきり走つて追いかけてくるとばかり思つた探偵が何故だかもたついている隙になんとか脱出してきた訳だが、結局の所あれでは何をしに行つたのかまるで分からない。ハイリスク・ノーリターンとは正にこの事だ。目的を尋ねてきた探偵にはとりあえず答えを丸投げして来たものの、もし、もしも、だ。探偵が真実（魔女の存在と、彼女に脅された形となつた怪盗との力関係）に辿り着いたとしたら。

その時は親父の墓前で土下座しかかないよな、などと遠い目をしていた快斗は、いきなりパーカーのフードを被せられ我にかえつた。突然のことにやや体制を崩しながら隣を見れば、なんだかまた機嫌が下降している幼なじみの姿。思考に沈みすぎて呼ばれていることに気付けなかつたらしい。

「もういい！今日はお寿司パーティーにしちゃうんだから！」

「な…っ！ちよ、待てって」

ある意味死刑宣告とも取れる台詞を吐いて先を歩き出した青子を慌てて追えば、完全に目の座つた顔がこちらを向く。長年幼なじみをやつてれば嫌でも分かる。これは本気の顔だ。

「だーっ！青子、いや青子様、それだけは勘弁してください！ちょっと昨日のマジックショーの改善点を考えてただけなんだって！ほらほら、今日のパーティー盛り上げるためには必要だろ？だからさ、頼むよー！」

そんなことをされたら命に関わるのだと必死に説得を試みれば、その様子に、ふうと小さく溜息をつく青子。が、青子が静かに口を開こうとしたまさにその瞬間。快斗は見てしまった。

「く…どう、しんいち…」

たった今すれ違ったのは。人込みに紛れて幼なじみの彼女と連れ立って歩いていった件の名探偵その人。

ヤバイ、そう思うよりも先に快斗の身体は青子の手を掴んで走りだし、一番手前の角を曲がると、そのまま近くの店に飛び込んだ。

優れた記憶力は先程自分達が往来で言い合っていた言葉を一言一句違わずに思い出せる。昨晩のことを彷彿とさせるような単語を口にした気がしないでもない。あの人込みの中一瞬すれ違っただけ、それだけの相手の会話を、恐らくデート中の名探偵が聞いているとも思えないが、なんとなく逃げずにはいらなかった。

「ちょ、ちょっと…快斗？何なのよ一体。青子いま許してあげようと思ってたのに」

自分からこんなとこ連れて来るなんて。

「…へ？」

いきなり全力疾走させられて僅かに息を切らした青子の言わんとしている事が分からなくて、ついマヌケな声が漏れたその直後、

「あら中森さん、今からお宅にお邪魔しようと思ったたのよ。こんな所で会うなんて、フフ、偶然ね」

心底愉しそうな声が店の奥から響いた。

「それでお父さんでは、またお母さんのこと怒らせちゃって…。結局二人とも意地張ってるだけなのよ」

米花町の駅前通りを並んで歩く幼なじみの、溜息混じりの話をぼんやりと聞きながら新一は、ふああ、と欠伸を一つ落とした。それを蘭が目敏く見咎める。

「新一、また夜遅くまで本読んでたんでしょ？いくら冬休みだから

って夜更かしは良くないわよ」

「ちげーよ、本なんて読んでないっての。寝不足なのは母さんと父さんのせい」

そう。自分が動けないのをいいことに、明け方まで喋り続けた母親。時差ボケなど皆無らしい彼女の話は

「女性に対する紳士の在り方」から始まり、最終的には何故か、10年程前に『お姉さん綺麗だから』などといった（本当かどうか怪しい）言葉と共に赤い薔薇をくれたという少年の話にまで飛躍したのだから。

隣家まで哀を送りに行った父親はなかなか帰って来ないし、ようやく母親から解放された頃に、ポストに入っていたらしい新一の携帯電話を手に戻って来たかと思うと今度は何故か詳しすぎるくらいに状況を把握している彼にからかい倒される始末。

彼等のおかげで昨晚は一睡もできていない。

ふああと、もう何度目かも分からない欠伸を零しながら、新一は更に思考に沈んでいく。隣で蘭が何言か喋っているのを遠くに聞きながら、脳裏に浮かんでくるのは昨晚の珍妙な二人の来訪者、そして隣家の少女。

黒髪の少女と怪盗の間に面識があることは、まず間違いない。わざわざ怪盗をリスクな場所に送り込むあたり仲間とは思いが、彼女の発言を聞く限りでは敵同士ではないだろう。そして、一晩（母親の説教を聞き流しながら）考えてみて思い至ったことが一つ。

ずばり、怪盗には目的も何もなかったのではないか、ということ。

「昨晚のアレはどうやら黒髪の少女が仕組んだことのようにだし、それに怪盗の漏らした

「相手が工藤新一だと知らなかった」宣言のこともある。ただそうすると、怪盗は何も知らされずに我が家まで彼女の思惑通りに足を運んだことになるのだ。しかもあの白い姿で。

「……………」

「なんだかあの魔女と怪盗の力関係を見てしまった気がして思わず首を振った。別に怪盗像に理想を抱いているわけでは決してない。ないが、魔女に脅される好敵手は…なんとなく見たくない。」

「魔女に脅される怪盗の図を勝手にイメージした己の思考を強制終了させる。そこで、沈みに沈みきっていた意識が一気に浮上した。」

「真っ先に視界に入ったのは、前から向かって歩いてくる自分達と同年代くらいの一組の男女の姿。赤い薔薇を一輪持った少女が、連れの少年にパーカーのフードを思い切り被せた光景だった。次いで届く途切れ途切れの会話に無意識に耳を傾ける。」

「も…いい！今日、お寿司…にし…、から！」

「その言葉に尋常でない程動揺する少年が新一の視界の隅に入る。徐々に彼等との距離は近くなり会話もより鮮明になっていく。」

「だーっ！青子、いや青子様、それだけは勘弁してください！ちょっと昨日のマジックショーの改善点を考えてただけなんだって！ほらほら、今日のパーティー盛り上げるためには必要だろ？だから

さ、頼むよー!!」

と、ここで完全にすれ違い、彼等の姿が視界から消えた。途端、ピタリと新一の歩みが止まる。

「寿司…、昨日のマジックショー…:…?」

妙に耳に馴染みのある言葉達を声に出して、脳内で反芻したのは一瞬。

「……っ!?!」

バツと後を振り返り見回す。が、彼等の姿はない。

「新一?どうかし…」

「蘭っ、悪い!先に行つててくれ!!」

「え、ちよ、新一!?!」

後方から響く幼なじみの困惑した声を聞きながら、新一は恐らく彼等が消えたであろう一番手前の曲がり角を目指して走り出した。

翌年 4月

「何でてめえがここにいるんだ、バ怪盗」

「そりゃこつちの台詞だ、アホ探偵」

「お前、米花大受けるって言ってなかったか？」

「お前こそ帝丹大受けるって言ってただらうが！」

「……………」

「……………」

「何で俺達仲良くやってんだらうーな？」

「仲良いかどうかは置いておくとして……。お前が俺を捕まえないからだろ」

職務怠慢だぜ探偵君？

「何だよ、捕まりてえのか？」

「……………」

「大体あんな棚ぼたみたいな捕まえ方納得いかねえんだよ。角曲がった途端に店から飛び出してきやがって」

「あれは…何の店か確認しないで入っちゃったから…まさかアレの店だとは思わなく、て…」

「天下の大怪盗様が魚嫌いだなんて情けない話だよなー」

ファンが泣くぜ？

「うっ…うっせえよ！名前出すな！！人のこと馬鹿にできんのか？あの後しばらく蘭ちゃんに口きいてもらえなかった癖して。『先 رفتてくれ』って？エスコートするつもりでプラン何にも教えてなかったくせに？何処に行けってんだよ。阿呆にも程があるっての」

「ぐっ！何で知ってんだよそんな事」

「ハッ、キッド様の情報網舐めんなよっ！」

「ストーカー…（小声）」

「んだと、てめえ…！」

「何だ、やんのか…！」

東都大学の正門前にあるカフェ、普段落ち着いた雰囲気を持つこの店は本日入学式を終えたばかりの東都大生で賑わっている。突如大きな声を上げながら立ち上がって店内中の注目を浴びた、よく似た顔の少年達がやや顔を赤らめて座るのを、一番遠い席から観察する二人の客がいた。

「二人が同じ大学になるように仕組んだのは貴女？」

赤茶の髪をした小学生くらいの少女が尋ねれば、向かいに座る黒髪の美少女が微笑む。

「いいえ、でもこうなることは分かっていたわ」

その答えに赤茶髪の少女、哀も微笑んだ。

「そう。…成る程ね、やっと貴女の真意が読めたわ。いずれ出会ってしまふのなら最も彼…怪盗さんに安全な方法で。そういうことだったのね」

こんな与えられたような真実を警察に売るような真似、工藤君に出来ると思えないもの。

哀の視線の先には、尚も小声で言い争いを続ける探偵と怪盗。

「まあそれも理由の一つではあるのだけれど」

「？」

含みを持たせた黒髪の美少女、紅子の言葉に哀が疑問符をとばす。

「いろいろと都合が良かったのよ。私は魔女の存在を否定した黒羽君に思い知らせて差し上げようと思っていたし、貴女は平和ボケしてなんとなく生活を送っている探偵さんのために危険の伴わない謎を求めてた。ああでも、イヴの日に私と探偵さんが会ったのは全くの偶然でしてよ?」

ところで私と貴女の関係、探偵さんは薄々感じていたようでしたけど。

微笑をひそめた紅子とは対照的に、哀は口角を吊り上げる。

「優作さん…、工藤君のお父上には気付かれてしまったけれど、工藤君の方は大丈夫よ。疑わしげな目でこちらを見ていたのはあの夜だけ」

優作さんが上手く言ってくれたのね、きっと。

今度は二人して少し声を上げて笑う。美味しいと評判の紅茶を手にとれば途端に広がる香ばしい香り。

そんな穏やかな午後のひと時をぶち壊す大声が再び、彼女達から一番遠い席より響いた。

『だから、紅子には勝てっこねーって!素でおっそろしい事考えるような奴なんだぜ?』

『んなの灰原だって同じだったの。可愛い小学生のふりして腹の底では何考えてるか分かりやしねえ』

カタン、と紅茶のカップをソーサーに戻す女性陣。

再び店内中の注目を集めた少年達が、悲鳴を上げる日は近い
かもしれない。

END

えびろーぐ（後書き）

完結…しま…し、た。尻切れトンボな感じが否めない（死） まあ
とりあえず、紅子ちゃんと哀ちゃんはマブダチよゝつていう話（違
つ）クリスマスから遅れること早4カ月…あああああ申し訳あ
りません（平伏） ここまでお付き合い下さった心優しい皆様、本
当にありがとうございます！！感想いただけたら嬉しいです、と
いうか今後の成長のためにご意見いただけないでしょうか（切実）

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3007d/>

聖夜の邂逅

2008年8月13日21時07分発行